という言葉を何度も聞いて、なみだがこみあげてきた。
堀口医師は、今日で新しくやって来る医師と入れかわる。この四日間、大変つかれたが、充実した日々であった。

一月二十四日

正夫は、夕食を食べながら、父から被災地での様子を聞いた。
「より困っている人がいたら、まず、その人の役に立つことができないかを考える。生命にかかわることであれば、なおさらだね。それが、人間社会のルールというものじゃないかなあ。被災地の人たちとボランティアの人たちに教えられたよ。」
正夫は、何だか申しわけない気持ちになってきた。
「しばらくして、また行けるように手続きをとってきたよ。」
父の言葉に続けて、正夫は言った。
「春休みには、ぼくもいっしょに行くよ。」

10 なみだの抗議

「いたいっ。なにをするんだ。」
夕方の混雑した電車の中で、若い男の人の声がした。
まもなく次の駅に着いた。かなりの乗客が降りて、車内は、立っている人の方が少ないぐらいになった。すいた車内を見回すと、私の席のななめ前あたりで、女の人をにらみつけ、何やらどなっている若い男の人が目についた。
やがて、それがさっきの声であることに気が付いた。
「ちゃんとあやまれ。」
「ですから、すみませんと、さっきから申し上げているじゃありませんか。」
「すみませんですむか。ちゃんとゆかに手をついてあやまってもらおうか。」
「そんな、電車がゆれたから、はずみでちょっとぶつかっただけなのに。」

「ちょっとだって。ひとのいたさがわかるのか。とにかく、あんたがぶつかったのは事実なんだから、さあ、そこに手をついてあやまれ。」

他の乗客も気にはなるのだろう、ときどき顔をあげて二人の方を見るのだが、だからといって何をするわけでもなかった。

「おにいさん。」

見ると、おばあさんだった。

おやっ、という乗客の視線をよそにおばあさんは立ち上がると、静かに若い男の人に向かってしゃべり始めた。

「ねえ、わざとやったわけじゃないんだし、こんなにあやまっているんだから、意地悪しないでもう許してあげなさいよ。」

男の人はいらいらした様子で、

「うるさいなあ。あんたには関係ないだろう。」

と言うと、おばあさんの体を軽くついた。そのとたん、足が弱かったのだろう、おばあさんはふらふらとよろめくと、ドシンとしりもちをついてしまった。

乗客は、みな同じように目をそらし、うつむいて息を殺していた。

男は、おばあさんには目もくれず、再び女の人の方を向くと、

「さあ、ちゃんと手をついてあやまれよ。」

と、つめよった。

女の人は、おびえているのだろう。下を向いたままだまっている。

「待ちなさい。」

精いっぱいの大声でさけんだのは、あのおばあさんだった。

「もう、やめておけばいいのに。」
私は、下を向いたままそう思った。
そんな私の心配どおり、男は、
「なんだよう。」
と言って、立ち上がると、すごい顔でおばあさんの方へと近づいて行く。
そのとき、おばあさんは再びさけんだ。けれども、そのさけびは、男ではなく、乗客に向けられたものだった。
「みなさん。みなさんは、本当に何も感じないのですか。こんなことをだまって見のがすつもりですか。自分さえよければいいのですか。」
私は、ガンと頭をたたかれたような気持ちになった。気がつくと、私は立ち上がっていた。
「やめてください。そんな意地悪。もうやめてください。」
泣きながらそう言うと、後は、声も出せずその場に立ちつくしていた。

男の人は、私の声におどろいたようだった。
一しゅんの間をおいて、急に車内がざわつき始めた。
「そうだ。やめなさいよ。」
「もういいだろう。」
「あんたは、まちがってるよ。」
と、あちこちで人々が立ち上がり始めた。
男は、それを見て、たじろいだようだった。ふるえ声で、
「な、なんだよ。」
と言うと、きょろきょろとあたりを見回した。
下を向いている乗客は一人もいなかった。すべての乗客がその男を見つめていた。
男はしばらくそうしていたが、やがて電車が次の駅に着くと、
「悪かったよ。」

と言うやいなや、にげるように出て行ってしまった。

女の人は、おばあさんの手をにぎり、深々とおじぎをした。その後すぐ、おばあさんは私に近づき、私をだきしめると、

「ありがとう。こわかったろうね。」

とやさしく言ってくれた。

山を緑に

—武田覚三—

「大変です。」

という知らせでかけつけてきた覚三は、あたりの様子におどろき、自分の目をうたがった。大勢の村人たちが、ぼうのさくをつくり、むしろの旗を立てて、口々に大声でさけびながら、野山の入口を守っているのである。

「帰れ。帰れ。絶対に測量させんぞ。」

「死んだって中へ入れるもんか。」

覚三は、「あれだけ時間をかけ、心をつくして村の人たちと話し合い、やっと分かってくれたのに。」と、この仕事の難しさをひしひしと感じた。

武田覚三は、この事件の一年前に三好郡役所に勤めることになった。あいさ

11　なみだのこう議

4 ―(3)　だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正，公平にし，正義の実現に努める。（公正公平，正義）

1主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

社会正義は，社会的な認識能力と人間の平等観に基づく人間愛が基本になければならない。また，わたしたちが明るい楽しい社会生活を送るためには，一人一人が正を愛し不正を憎む気持ちをもつことが大切である。

不正な態度とは何か，本当の正義とは何なのかをしっかり見極めることのできる力を身につけていくことが，正しいと信ずることの実現を図っていくうえには欠くことのできないことである。

〈子どもの実態について〉

「不正は許せない」という心情は高まってきている。そして，集団作りの高まりとともに帰りの会での話し合いにも本当に正しいことは何なのかが確認されるようになってきた。ただ，子どもの生活の中には，まだまだ不正とは気付いていてもそれを正そうとするまでに至っていない面も多く見られる。

〈資料について〉

混雑した電車の中で，若い男が「足をふんだことを謝まれ。」と文句をつけている。乗客はみな見て見ぬふりをしている。見かねた一人のおばあさんが若い男に注意するがつきとばされてしまう。「みなさんは何も感じないのか。」というおばあさんの声に，私は思わず「もう，やめてください。」と若い男に抗議するという内容である。

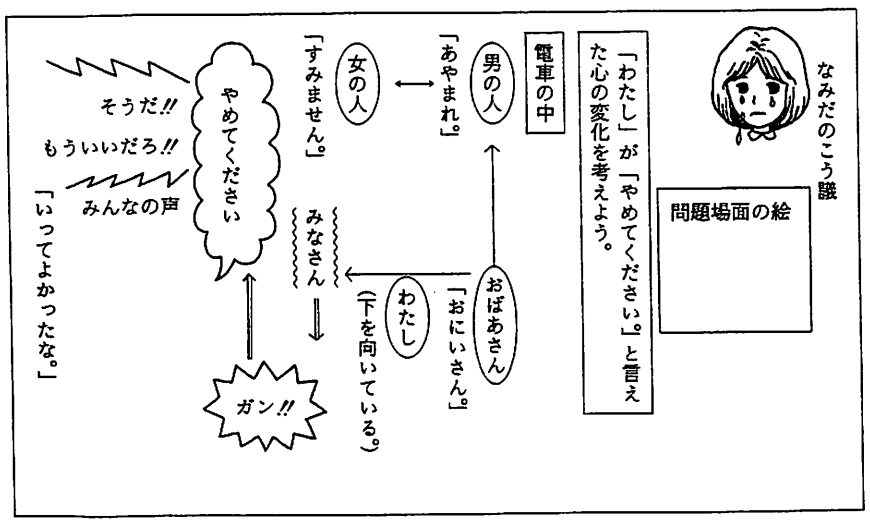
発問にあたって，特に，おばあさんの会話の部分には十分注意し，その場の臨場感を話し合いの中に持ち込めるようにしたい。

また，勇気ある行動に立ちあがるまでの主人公の心の動きを，内心の声の部分，あるいは行間からしっかり捉えさせ，勇気ある決断を下した過程をとらえさせるようにしていきたい。

2ねらい

不正を憎み，勇気をもって正しいことをしようとする態度を養う。

板書



3展開

学　習　活　動	支援上の留意点
(1)　周りの人に対して横暴なふるまいをしているのを見たことを話し合う。 ○　電車やバスの中で周りの人に横暴なふるまいをしているのを見たことはありませんか。 ・バスの中で大声を出している人がいて，こわかった。	・　適当な新聞記事などもあれば活用して，小さい正義の実現についての問題意識がもてるようにする。
(2)　資料「なみだのこう議」を読み，「わたし」の心の変化を中心に話し合う。 ①「わたし」は，若い男の人と女の人とのやりとりを黙って見ている周りの人に，どんな気持ちでいたのでしょうか。 ・だれか止めてくれないかな。 ・女の人がかわいそうなのに周りの人はどうして知らん顔かな。	・　主人公自身も周りの人と同じ立場に立っていることを捉えることができるようにする。
②　しりもちをついたおばあさんが「待ちなさい。」と大声で叫ぶのを下を向いて聞いている「わたし」はどんなことを考えていたのでしょう。 ・やめておけばいいのにと思っている。 ・今度は，きっとおばあさんがやられるぞ。	・　主人公をはじめとして，いやなことには関わりあわないでいようとする心の内をしっかり捉えることができるようにする。
③「みなさんは，じぶんさえよければいいのですか。」と言うおばあさんの叫びを聞き，わたしは，どんな気持ちで「やめてください。」と言ったのでしょう。 ア　とても勇気のある行動だ。 イ　思っていてもなかなかできないことだけど，よく決断した。 ウ　あとのことを考えるとなかなかできないことだ。えらい。	・　役割演技を取り入れることによって，おばあさんの訴えたいことをしっかり捉えることができるようにする。また，不正を排除するために行動することの難しさにも気付くよう助言する。 ・　自分の考えがア，イ，ウのどれに近いか，自分ならどうするかの立場での発言を促す。
④「ありがとう。こわかったろうね。」とおばあさんに優しく言われた時の「わたし」の心の内はどんなだったでしょう。 ・なみだが出たけれど，言えてよかった。 ・おばあさんが，私の心の内をわかってくれたんだ。うれしい。	・　不正な行動をやめさせようと立ち上がってよかったと思っている主人公の心の内を，しっかり捉えられるようにする。
(3)　毎日の生活の中で，正しいと思ったことをやりとげられた経験を話し合う。 ○　正しいことをやりとげてよかったと思ったことにはどんなことがありましたか。 ・友達をいじめている子に注意した。	・　心で決めてもそれをやりとげることの難しさも含めて話し合うことができるようにする。
(4)　教師の話を聞き，正しいと信じることをやりとげる大切さを知る。	・　教師の体験談などをもとにして，実践への意欲をもつことができるようにする。